

令和4年度 東京都内湾水生生物調査 9月稚魚調査 速報

●実施状況

令和4年9月7日に稚魚調査を実施した。天気は小雨交じりの曇りで、気温は28.9～30.4℃、調査地点の風は城南大橋と葛西人工渚では南寄り、お台場海浜公園では北東で、風速3.0～3.5mであった。調査当日は中潮で、干潮は8時32分、満潮は16時08分であった(気象庁のデータ)。

城南大橋とお台場海浜公園では赤潮が発生していたが、これら地点において多くの生物が確認された。

	城南大橋	お台場海浜公園	葛西人工渚
作業時刻	8:24-9:39	10:03-11:15	11:45-13:30
水温(℃)	27.7	27.7	28.0
塩分(ー)	16.0	18.8	11.6
透視度(cm)	16.0	46.0	14.5
DO(mg/L)	7.3	7.8	5.2
DO飽和度(%)	102.0	110.8	70.9
波浪(m)	0.1	0.1	0.1
pH(ー)	8.0	8.4	7.8
水の臭気	弱下水臭	弱魚臭	弱下水臭
備考	干出面積は小さかった。 赤潮が発生していた。	赤潮が発生していた。	

●主な出現種等 (速報のため、種名等は未確定)

主な出現種等	城南大橋	お台場海浜公園	葛西人工渚
魚種 (多い順 ^注)	ヒイラギ(c)	ビリンゴ(c)	マハゼ(c)
	サツパ(+)	ニクハゼ(+)	トウゴロウイワシ(c)
	シロギス(r)	トウゴロウイワシ(r)	ビリンゴ(+)
	マゴチ(r)	ヒメハゼ(r)	ミミズハゼ(+)
	マハゼ(r)	クロサギ(r)	マゴチ(r)
魚類以外	ニホンイサザアミ(G)	コウロエンカワヒバリガイ(r)	ニホンイサザアミ(G)
		アサリ(r)	シラタエビ(m)
		シラタエビ(r)	エビジャコ属(c)
備考	他にスジハゼが採集された。	他にヨウジウオ、ホンビノスガイ等が採集された。	他にギンガメアジ、サツパ、ヒモハゼ等が採集された。

注) 表中の()内の記号は大まかな個体数を表す。

G:1000 個体以上、m:100～1000 個体未満、c:20～100 個体未満、+:5～20 個体未満、r:5 個体未満

城南大橋 採取試料



城南大橋西詰めにある干潟。北側には東京港野鳥公園がある。調査時、干潟はあまり干出していなかった。

●主な出現種等 ※写真のスケール1目盛:1mm



東京湾では湾奥から外湾にかけての砂浜海岸などで多くみられる。稚魚は動物プランクトンやアミ類を食べて成長する。警戒心が強く、危険を感じると砂に潜る習性がある。産卵期は5～10月。



東京湾では湾全域の干潟域や漁港等でみられる。干潟域には体長6～7mm程の稚魚が6～8月にかけて来遊し、動物プランクトンを食べて成長する。



東京湾では内湾を中心に湾全域でみられ、特に内湾の浅所や河川の河口域の砂泥底に群れで生息する。産卵期は主に夏季。体長7～8cm前後で成熟する。



内湾や河口域の水深30m以浅の砂泥底に生息する。産卵期は4～7月。成長するにつれて徐々に深場へと移動する。肉食性で、小魚などを食べる。

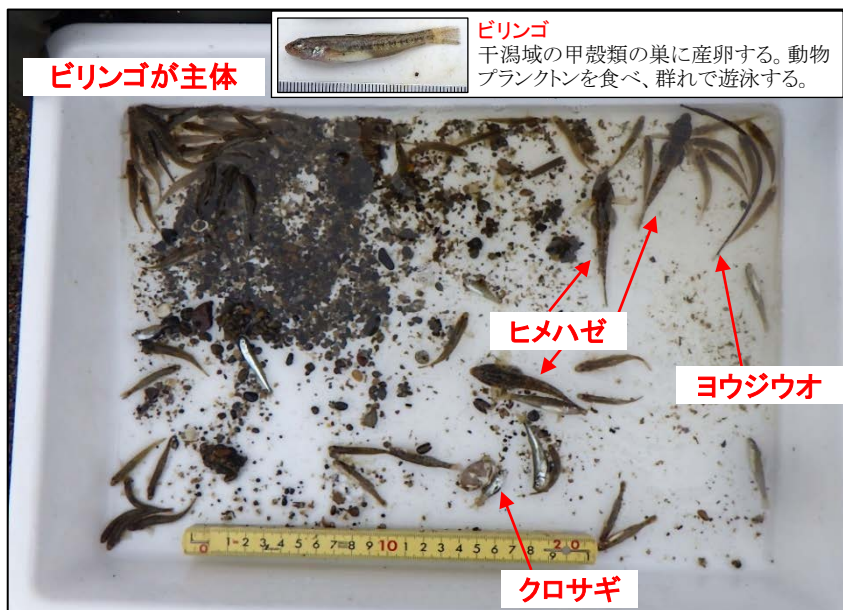


全長8cm程になる。体側に小さな青色の斑点が散在する。東京湾では湾奥から湾央にかけての水深10～40mほどの砂泥底に生息する。



東京湾を代表するハゼの仲間。河口域を中心に生息するが、河川淡水域に遡上することもある。春から秋にかけて干潟で成長し、冬になると産卵のため深場へ移動する。

お台場海浜公園 採取試料



水際数 m で急に深くなる人工の渚。レインボーブリッジのたもとにある。

●主な出現種等 ※写真のスケール1目盛:1mm



砂底域に生息する。前方に突出させた口を砂底に突っ込み、多毛類や藻類等を食べる。仔稚魚の群れは漁港でも確認されるが、東京湾奥ではあまりみられず、この調査でも8年ぶりの出現となった。



内湾のアマモやアオサの繁茂した場所、転石域等に出現するほか、河口域でもみられる。ビリンゴによく似るが、ビリンゴの口が小さいの比べ、ニクハゼは目の後端の先まで口端が伸びている。



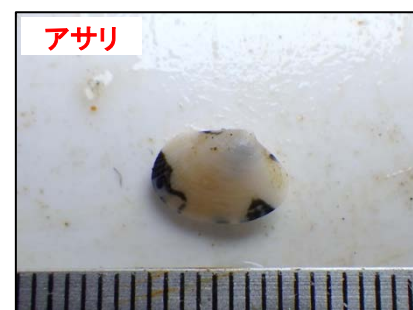
東京湾では、湾奥から外湾にかけての沿岸で普通にみられる。産卵期は夏で、秋にかけて仔魚が東京湾全域に出現する。イワシ(ニシン科)という名前がつくが、ボラに近い仲間。



全長 9cm 程になる。内湾や河口干潟域の砂底や砂泥底に生息する。危険を察知すると砂に潜る習性があり、体の模様も砂や砂利の色にそっくりである。



ヨウジウオ科では東京湾で最も普通にみられる種。湾奥から外湾にかけてのアマモ場で多くみられる。全長 30cm 程度になるが、本調査では10cmを越える大きな個体が採れることはまれ。



東京湾のものは模様のコントラストが強いものが多い。着底した稚貝は足糸を分泌して砂礫などにくっつき、しばらく付着生活を送るが、成長すると足糸が切れて砂泥に潜る。

葛西人工渚 採取試料



東京湾奥にある広大な人工干潟。野鳥等保護区域のため、一般の立ち入りが禁止されている。

●主な出現種等 ※写真のスケール1目盛:1mm



成魚は暖流の影響を受ける沿岸に生息する。東京湾では体長 5 cm 程の稚魚が湾奥から外湾の河口域や砂浜で見られる。稚魚は黄金色の地に 6 本の縞模様と目立つ体色をしている。



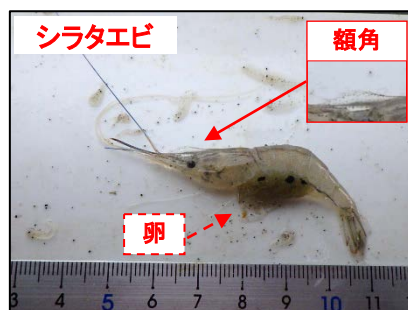
河口域や潟湖の干潟域に生息する。体はミズのように細長く、体側には暗色の縦帯が走る。全長 4cm 程。アナジャコなどの甲殻類の巣穴を産卵場所や隠れ家として利用する。



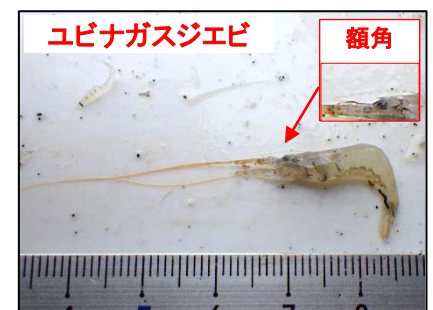
湾奥の干潟域に生息し、砂泥地を好む傾向にある。アナジャコの巣穴を隠れ家として利用している。小型の甲殻類を食べる。



内湾の砂泥底に生息し、普段はごく浅く潜って隠れている。体色は周囲の環境に合わせて変化する。小さな体のわりに臍猛で、稚魚等を捕食することが知られている。



青い触角が特徴。額角の基部が盛り上がることでスジエビ類と区別できる。汽水域を主な生息場所としているが、干潟にもよく出現する。今回、抱卵した個体が採取された。



内湾域の転石場や護岸に多く生息する。体長 4cm 程。体全体に色素が分布し、生きている間は褐色にみえる個体が多い。額角はほぼ水平、先端上面が下向きになる。